



日本植物病理学会ニュース 第93号

(2021年2月)

【学会活動状況】

1. 部会開催報告

(1) 北海道部会

令和2年度の日本植物病理学会北海道部会は、新型コロナウイルス蔓延防止対策として、10月16日(金)に一般講演のみオンライン(一部、北海道大学農学部多目的室を併用)で開催され、67名(オンライン61名、多目的室6名)の参加があった。通常一般講演と併せて、病害のテーマに沿って開催される談話会については中止とした。一般講演では、15題の講演があり、内訳は菌類病が9題、ウイルス・ウイロイド病が6題であった。オンラインによる開催ははじめての試みであり、ホストPCの設置や予鈴・本鈴など進行にかかる事務局機能は、多目的室において実行幹事と学生アルバイトで行った。一部の演者で接続と画面共有に関するトラブルにより講演開始まで数分の遅れが生じたが、座長もオンラインで問題なく行われ、質疑等もスムーズであり、概ね通常の開催に近い状態で実施できた。一方、懇親会の開催も見送ったことから、部会員同士の情報交換が実施できなかったことは残念であった。次年度の北海道部会は、令和3年10月14日(木)～15日(金)の2日間、北海道大学(札幌市)において開催予定である。

(小松 勉)

(2) 東北部会

令和2年度日本植物病理学会東北部会は、10月9～12日の4日間にわたり開催された。コロナウイルス禍でも東北部会会員に研究発表の場を提供する目的で、今年度は日本植物病理学会ホームページのプラットフォームを利用してオンデマンドで開催された。参加者は、一般47名、学生39名の計86名であった。講演発表は、菌類病6題、ウイルス・ウイロイド病12題、植物保護6題の合計24題で、動画あるいはeポスターの形式により行われた。各講演発表に関する議論・情報交換は、各発表の掲示板により行われた。幹事会は部会開催期間中の10月10日にオンラ

インにより行われた。次年度部会長には秋田県立大学生物資源科学部の藤晋一氏が選出された。また、本年度の日本植物病理学会東北部会地域貢献賞は、宮城県農業・園芸総合研究所の大場淳司氏[日本ナシ品種「あきづき」の黒星病に対する耐病性]に授与された。令和3年度は宮城県での開催が予定されている。

(磯貝雅道)

(3) 関西部会

令和2年度日本植物病理学会関西部会は、11月7日(土)午前9時から11月8日(日)午後5時までの2日間、島根大学を開催地としたオンライン形式で開催され、コロナ禍に負けることなく例年どおりの活気ある部会となった。日本植物病理学会代表理事により示された対面による部会等は原則開催しないという方針を受け、他部会同様に関西部会でも初めてのオンライン開催となり、当初は参加者数や発表者数の減少が懸念されたが、参加登録者数202名/発表数90題と盛会であった。総会に先立ち役員会をリモート会議で開催し、例年の総会に代わりオンライン会場における資料の掲示という形での総会報告となったが、大きな混乱も無く、全ての議案が承認された。次期部会長には鳥取大学の児玉基一朗氏が選出され、また次年度の部会は令和3年9月21～22日に金沢で石川県立大学を開催地事務局として開催されることが決定された。例年総会終了後に行われる部会長講演は、オンライン開催のため、秋光による「植物・病原菌への希少糖作用機構」の講演録画を掲載する形で行われた。一般講演は、菌類病、細菌病・ファイトプラズマ病、ウイルス病・ウイロイド病、植物保護のカテゴリーに分類され、オンライン上で活発な質疑応答が交わされた。それぞれのカテゴリーの発表数は、菌類病41題、細菌病・ファイトプラズマ病21題、ウイルス病・ウイロイド病7題、植物保護21題であった。2日間の総閲覧数は6,557、一演題あたりの平均閲覧数は72、一名あたりの平均閲覧数は32、総質問数は205、一演題あたりの平均質問数は2.07であり、オンラインでも例年と変わら

ない活気ある部会が開催されたことが数字の上でも明らかとなった。

今回の部会は、不測の事態に直面して短時間で新しい開催形式を模索することとなったが、島根大学木原淳一開催委員長、上野誠開催地幹事をはじめ島根県農業技術センター、島根県内外の植物病理関係者、役員会および協賛団体のご尽力と多大なるご協力によって無事成功裏に開催できた。ここに記して、心より厚く御礼申し上げたい。

(秋光和也)

(5) 九州部会

コロナ禍で、鹿児島県での大会が中止になり部会の開催の有無が春から議論された。例年、九州部会は秋に九州病害虫研究会との合同開催を実施していたが、同研究会の開催中止の決定により、今年度は九州部会単独で開催することになった。開催方式はダイナコム社のシステムを利用し、11月16日から18日にかけてオンデマンド方式で開催した。参加申し込み数は40名であった。一般講演はウイルス病関連4題、細菌病関連3題および菌類病関連7題の合計14題で、ネット上の掲示板において活発な質疑応答が3日間に亘り展開された。今回は学生優秀発表賞の選考は実施されなかった。また、幹事会のメール会議に基づき、総会もオンライン開催により実施された。総会においては、次期部会長に宮崎大学の竹下稔氏が選出された旨報告された。また、感染生理談話会が平成3年に宮崎市内で開催予定であることが、竹下氏から報告された。さらに次年度の部会は、熊本県で開催されることが決定された。来年度の部会開催時期までにはコロナの影響が収まり、通常通りの対面形式により実施され、より一層活発な議論や情報交換がなされることを祈念します。

(古屋成人)

【会員の関連学会等における受賞のお知らせ】

浅井秀太氏（理化学研究所）が、2020年度（第19回）日本農学進歩賞を受賞されました。日本農学進歩賞は、財団法人農学会が農林水産業およびその関連産業の発展に資する農学の進歩に顕著な貢献をした優秀な若手研究者を顕彰する賞です。受賞の対象となった研究業績は、「卵菌綱植物病原菌の感染機構に関する研究」です。授賞式および受賞者による受賞講演会が、2020年11月27日（金）に東京大学農学部弥生講堂にて関係者のみにて開催され、授賞式・講演会がオンライン配信されました。（山次康幸）

【書評】



人に話したくなる土壌微生物の世界 一食と健康から洞窟、温泉、宇宙まで、

染谷 孝 著, 2020, 築地書館, 東京. 196 pp. 四六判, ソフトカバー, 定価 ¥1,800 (税別)

本学会会員の染谷孝先生といえばそのお名前のとおり‘お染’ということで、何ととっても蛍光染色技術を駆使して普通には目に見えない土壌微生物の世界を

可視化した業績が特筆されます。植物病理学で土壌微生物といえば、まず思い浮かぶのは土壌伝染病原菌でしょう。しかし、土壌中には病原菌以外に多種多様の微生物が存在しているわけで、土壌病害対策にはPGPMを含めて病原菌と他の微生物、植物との相互関係の理解と解明が必要なのは言うまでもありません。先生には第28回土壌伝染病談話会で土壌微生物の観察とモニタリングのセッションにおいて、我々の世界にこれまでなじみが薄かった蛍光染色を用いた土壌微生物の評価方法について、‘生体染色と特異的染色’と題して詳しく解説いただいております。

この度、染谷先生が‘人に話したくなる土壌微生物の世界—食と健康から洞窟、温泉、宇宙まで—’を上梓されました。本書は土と微生物、善玉菌を活用する—微生物資材、土の中の病原菌、堆肥と微生物—など8章から構成されています。土壌微生物の具体的な働きとして、植物の発育を支えたり、病原菌から守ったり、逆に植物やヒトに病気を引き起こしたり、堆肥を作ったり、農薬を分解したり、地球の大気を創ったり、世界遺産を劣化させたり、巨大洞窟を作ったり、温泉で暮らしていたり、等々、専門的かつトリビアな話題が満載です。本書は専門語を極力控え、解りやすく書かれており、中高生からでも楽に読むことのできる一般啓蒙書です。しかし、内容はとても濃いものがあります。このため、人に話したくなるというタイトルに納得させられます。

その一方で、本書を拝読して私が感じたことは、本書は‘実学の土壌微生物学’の教科書そのものということでした。先生は東北大学大学院を修了後、2019年3月に佐賀大学農学部を定年退職されるまでの37年の長きにわたって土壌微生物一筋の研究人生を送られております（現在、佐賀大学名誉教授であり、招聘教授として研究活動を継続

中)。私は先生が1994年に佐賀大学に着任されて以降、折に触れて何かとご指導とご鞭撻を賜るとともに、共同研究にも参画させていただいております。打ち合わせで先生の研究室にお伺いするのですが、電話や来客の多さにいつも驚いていました。大学や研究機関との学術活動から市民グループや企業、農家の相談対応、趣味と実益を兼ねた活動(洞窟探検など)まで多岐にわたってエネルギーに活動されていることに感銘を受けたものです。大学の先生がここまでされるのかと。

結果、それらの活動が本書にも色濃く反映されています。本書では土壌微生物の役割とその働きについての基本的な解説に留まらず、産業や人々の生活との関わりについて豊富な具体例を挙げて紹介されているところが実学につながっています。なかでも特に高く評価されるのが、「堆肥と微生物」の章です。堆肥の植物病害抑制効果、段ボール堆肥—家庭で作る生ごみ堆肥(佐賀大学の教養教育プログラムで学生が取り組んだ生ごみの堆肥化)、地域の生ごみ堆肥化施設—先駆者はちがめプラン、大学による支援などの項は読みごたえ満点です。基礎研究と農業現場や生活の役に立つ実学との関わり合いが、生き生きと描写されています。農学は実学の一つですから、先生の取り組みはまさにこのことを実践されている最たる例であると言えます。

本書は一般啓蒙書でありながらも巻末に豊富な参考文献が収録されていることも特徴の一つです。本学会員各位におかれましては「自然の探究者の一人」として、ぜひ本書を手にとっていただき、染谷ワールドに浸って土壌微生物の世界を楽しく俯瞰していただくとともに、学術面のみならず現場に役立つ仕事の取り組み方の参考にしていただければと思うところです。本書を強く推薦します。

(田代暢哉)



「花木・鑑賞緑化樹木の病害虫診断図鑑」(第1巻 病害編, 第2巻 害虫編)。堀江博道・竹内浩二・近岡一郎編著, 2020, B5版・函入り, 852 pp (カラー676 pp), 定価18,000円(税別) シリーズ「植物医科学叢書」のNo. 6として出版された書籍を紹介します。

のっけから我田引水的な話で恐縮であるが、静岡県



には「写真で見る農作物病害虫診断ガイドブック2019年」(静岡県植物防疫協会, 3,000円)という本がある。これは、今では全国の都道府県が発行するようになった、農作物の病害虫診断を目的としたカラー版書籍の先駆けとなった本で、1992年(平成4年)の初版以来、改訂・増補を重ね、2019年に最新版を

発行している。この本の売れ行きはハッキリ言って初版以来ず〜っと好調である。その理由として、価格の安さ(静岡県の病害虫関係職員が仕事の一環として執筆・編集を担当しており、印刷・製本代のみを実費として価格に反映させている)が上げられるが、購読者からの意見として、「典型症状のみでなく、初期症状や末期症状を載せている点が診断に役立つ」と評されている。また害虫の写真はもとより、病害についても、病原体の写真をも可能な限り掲載することで、ルーペや顕微鏡を使った丁寧な観察が可能となり、農林事務所やJAで診断する際の大きなヒントを与えることに成功している。主要病害虫では平均6枚(最大8枚)の写真を用いて説明している。

実際、農作物に限らず、植物の病害虫に関する本はあまた出版されているが、その多くは紙面の関係からか、写真が典型症状に限られている場合が多い。さらに、そうした本は、売れ行きを考えてのことだろう、園芸愛好家が購入しやすいように、病原体や害虫に関する詳細な記述や拡大写真はまず掲載されない。顕微鏡写真などは皆無と言ってよい。しかし、その一方で、学会発表したり論文を書いたりする研究者としての立場からすると、学名や形態等を始めとする病原体や害虫の詳細を知ることが出来ないために、こうした本は参考にはするけれども内容的に極めて不十分である。

しかし、もしここで、病原体や害虫の学名や生態に関する記述とともに、植物が示す全体的な症状(全体像)から始まって、病害の場合では、初期・典型・末期症状などの拡大写真、さらには病原体の顕微鏡写真、害虫の場合には卵・幼虫・蛹・成虫の鮮明な拡大写真が載せられている本があれば、園芸愛好家(アマチュア)から研究者(プロ)まで非常に幅広い方々に有益な本となることは疑う余地が無い。しかも、そこに掲載されている植物が、特定の地域や都道府県に限られたものでなく、全国に広く分布する植

物を扱ってくれたなら、正に鬼に金棒の診断ガイドブックとなる。

長い前置きで大変に申し訳なかったが、樹木に関して上記の条件を全て満たしてくれたのが今回紹介する本となる。一言で言えば「理想の本」である。理想は実現が難しい。あれば良いとは誰もが思うものの、実際にそれを実現するには、人材や労力が壁となり実現されずに年月が流れていく場合がほとんどである。しかし、今回、樹木の病害虫に関し、理想が実現した。快挙である。企画し、執筆・編集された堀江先生を始めとする方々の尋常ではない努力と能力・実行力に深く敬意を表する次第である。

さらに、この本は、樹木を相手にしている方のみではなく、穀物・野菜・草花と言ったいわゆる草本性植物・一年生植物を相手にしている方々にも有益であることを付け加えねばならない。診断業務に関し、長い経験を有する方は気付いていることであるが、病害虫の診断は、見るコツを掴みさえすれば、植物が木本性だろうが草本性だろうが関係なく可能である。今回の本を傍らに携帯し、観察の際のコツを身につければ、それは穀物・野菜・草花の病害虫診断にも充分に応用がきくものである。

少し細かい点にも触れておきたい。まず、掲載されている樹木は「科」の順に並べられているが、検索しやすいように、ア行は青、カ行は黄色という感じで色分けされた帯がページ上部に示されている。また、病害虫による障害・異常のみでなく「生理障害」についても写真と説明が加えられている。害虫編では天敵類についても鮮明なカラー写真が満載されている。写真は相変わらず美しく鮮明で、どれもうっとりさせられるが、植物病原菌を扱う私としては、特に、子囊殻・分生子殻・分生子層・子座等の断面写真の素晴らしさを強調しておきたい。

前回、「増補改訂版 カラー図説 植物病原菌の見分け方」(上下)を紹介した時に、「正直、植物病理に関する他の書籍が売れなくなってしまうのでは?という心配さえ抱かせる」と記したが、今回、その思いをより一層深くした次第である。ついでに最後まで、前回と同じ文章で締めくりたい。「誉めすぎと思うなら、一度、手にして実物を見て頂きたい。カラー写真をみただけで、貴方もきっと買いたくなりますよ」
(外側正之)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで、よろしく願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

藤田佳克、山次康幸、足立嘉彦、宮本拓也、竹内香純

編集後記

明けましておめでとうございます。新年にあたり、会員の皆様のご健勝と学会のますますの発展をお祈りいたします。

学会ニュース第93号をお届けします。本号は部会の開催報告を中心に掲載しました。

令和2年度の部会は、北海道、東北、関東、関西、九州いずれも新型コロナウイルス蔓延防止策として、オンラインで開催されました。オンラインによる開催は初めての試みでしたが、いずれの部会とも多くの参加者があり、活発な議論や情報交換が行われ、大きなトラブルもなく盛会裏に開催されています。また、東北部会では地域貢献賞の授与も行われています。困難な状況の中、会の開催や運営にご尽力頂いた皆様に、感謝申し上げます。

昨秋、浅井秀太氏が日本農学進歩賞を受賞されました。今後益々のご活躍とご発展を祈念致します。

昨秋刊行された「人と話したくなる土壌微生物の世界」を田代暢哉氏に、「花木・鑑賞緑化樹木の病害虫診断図鑑」を外側正之氏にご紹介頂きました。基礎研究と現場の実学に役立つものと期待されます。

来年度までには、コロナ禍の影響が収まり、通常通りの開催が行われることを祈念します。
(藤田佳克)